

Web 版注※ 青字のリンクをクリックすると書評ブログ「いとちり Books」  
[\(http://d.hatena.ne.jp/itochiri/\)](http://d.hatena.ne.jp/itochiri/) の当該の本の書評ページに飛びます

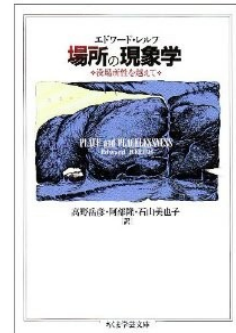
地理学年末 特殊講義「地理学」への招待 (1)

## 「場所」の探求・・・地理学と哲学のシンプルかつ重要な関係

### 【1】場所とはなにか？

#### E. レルフ『場所の現象学』

(原題：「場所と没場所」)



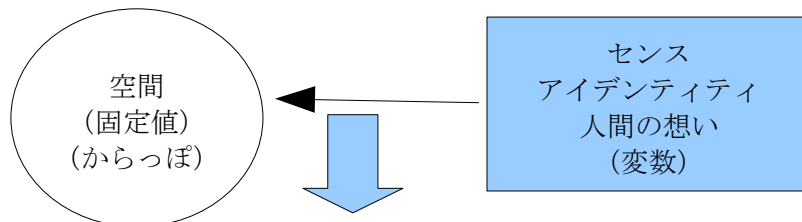
その「空間」

- スペース (space) x, y, z, t で示される絶対的空間 (無機質)  
(分布、広がり、移動の軌跡→数学的な分析可能)
- ゾーン (zone) ・ある特定の基準で仕切られた場所  
(フリーゾーン、ミックスゾーン)
- エリア (area) ・行政界や、政治的、人為的に仕切られた範囲  
(再開発エリア、インナーエリア)
- コミュニティ (community) ・そこに関わる人間の属性に基づいた場所  
(町内会、民族集団など)
- 景観 (landscape) ・・・・その空間を作っている要素 (ビル、山、川)

▶可視化 (地図化) は容易=メジャーな地理学の対象

可視化しにくい「場所」 (place) が忘れられていないか？・・・本書の主張

### 【2】空間≠場所



“場所” になる

空間 (固定値) × からのめる人間の立場 × 人間の想い = 「場所」

同じものを見ていても、見る人の立場、経てきた経験、視点 (まなざし) によって「場所」は異なる = 2つとして同じ「場所」は存在しない = 現象学 (哲学の一分野)

### 【3】没場所・・・現代世界は「没場所」に溢れ、地理学はそれに加担している？

- ・「場所」の多様性=人間の捉え方を考慮に入れない場所。
- 「コピー&ペースト」が如く、同じような景観が量産→「ディズニー化」 (砂漠の中のおとぎの国)  
無理に「場所的」な物を強調。人々の「場所の多様性」を拒否して「見え方」を最初から提示  
→「博物館化」⇒「地域活性化」論に警鐘 (活性化=善、衰退=悪の二元論)
- 久繁哲之介 (2010) 『地域再生の罠—なぜ市民と地方は豊かになれないか』 (ちくま新書)
- 竹井隆人 (2009) 『社会をつくる自由—反コミュニティのデモクラシー』 (ちくま新書)
- ・「場所性」の放棄・・・「位置情報化」の功罪 (「条件検索」&「置換」で地域は理解可能?)  
ex. アメリカの誰もいない砂漠 <政府> 不毛の地高レベル核廃棄物のゴミ捨て場として「最適」  
<先住民> 「聖地」故に誰も近寄らせなかった  
⇒先住民は、すったもんだの議論の末に「受け入れ」を選択  
(鎌田 遵 (2007) 『ネイティブアメリカン—先住民社会の現在』 (岩波新書))

- ・「ディズニー化」「マクドナルド化」  
あらかじめ決められた規格があり、「もうけの方程式」があり、同質のものが場所を選ばず  
→日本でいうなら「イオン化」か？
- ・日本の原風景『水田』も実は「没場所」だったりする。  
→出回っているコメの3分の2が「コシヒカリ」ファミリー  
佐藤 洋一郎 (2010) 『コシヒカリより美味しい米』朝日新書  
これからの世界が選ぶ道の選択肢は2つ・・・「場所」がある世界 or 「没場所」ばかりの世界
- ・没場所への抵抗＝結局「没場所」・・・「博物館化」  
(変化を拒否、展示資料がごとき解釈の強要) →これはこれで息苦しい。「〇〇を世界遺産に」

### 【3】で、結局「地理学」ってなんだろう。

#### ・空間を一定の手順に従って「料理」するノウハウ

- きざんだり、ダシをとったり (エッセンスを抽出)、切り分けたり、調味料で味付けしたり、
- 盛り付けて、「論文」として出す。
- 食べる人 (その研究を利用する人) がどんなシチュエーションで食べるのか、血となり骨となるかについては、あまり関心を持ってこなかった。
- 食材の知識 (地名) マニア、盛り付けにこだわるマニア、電子レンジ (GIS) 好きなどなど。



「料理」自体は、ほかの料理法 (経済学、社会学、文化人類学) のほうがはるかに食べやすい (美味しいかどうかは別として)

- ・場所性・・・その人それぞれの「おふくろの味」  
＝尊重されるべきだが、それだけでは商売にはならない。  
＝料理 (研究) はできるかもしれないが、不特定多数をうならせる「商品」になりにくい。
- ・没場所性・・・料理に例えるならば「ファーストフード」「冷凍食品」  
＝誰が料理 (温めても) 同じ味。失敗が少ない。  
←それ自体を非難する理由はない。ただ、毎日のおかずがそれではむなし。
- ・数値・計量崇拜主義  
＝分析の方法としては有効かもしれないが、「タンパク質」「炭水化物」「塩分含有量」といった数値だけで料理を語るのもいかなものか。

#### <富士市を例に>

- ・工場の煙突群
- ・躍動する街、産業のシンボル、たった一代でここまで築き上げてきた苦勞の象徴 (経営者)
- ・3交代を頑張りぬいて定年退職。仕事人生そのもの (労働者)
- ・公害の忌まわしい記憶 住みにくい街のシンボル (公害で苦しんだ住民)
- ・景観破壊、富士市の観光が伸びない根源 (観光関係者)
- ・近未来的景色。無駄のない配管と技術「工場萌え」 (工場好きのマニア)
- ・故郷の景色にそっくり。ふるさとを思い起こす景色 (北海道の製紙の街から来た人)  
←私は北海道の製紙の街を見て、しみじみそう思いました。



#### 「まちおこし」「景観改善」「煙突撤去」と軽々しくは言えない

- ・街の開発＝最大公約数を探っていくしかない
- ・優先撤去地域・・・「数値的な条件検索」も利用する必要。

### 【4】まとめ

- ・地理学は「場所」を取り扱う学問。答えは一つとは限らない。
- ・底流に流れているのは「哲学」
  - ◆すべてをそぎ落としたとき、その場所特有のものは何か、
  - ◆そこにいる人が最大公約数として持ち合わせているものは何か
  - ◆その場所を形成している様々な「要素」を掛け合わせ、強調していった時、その場所にいる人誰もが「場所意識」を高められる方策 (最小公倍数) は何か？

#### ○E. レルフ「場所の現象学」・・・某大学の地理学科、入学前課題図書

→かなり難解な本だが、「大学生」らしい物言いをしたい人は読んでみてほしい。